あの日見た満月

キリリョー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの日見た満月

【Ｎコード】
Ｎ５２９６Ｘ

【作者名】
キリリョー

【あらすじ】
おっす！おら翔！この物語の主人公だ。この物語は俺の青春の話だ。
この春、俺は軽音部に入った。このことで俺の人生は変わった・・・

はじまり（前書き）

警告！この話は完全ド素人が創った話です。

色々と見苦しいと思いますが、ご了承ください。

はじまり

あの日の夜もこんな満月だったな。

コンビニからの帰り道、俺は夜空を見上げながら帰っていた。

ちなみにコンビニで買ったものはエロ本だ。

毎月買っているやつだからな！

俺の名前は桐生翔。歳は１７で、この春から高３だ。趣味は特になし、好きなものはエロ！１７歳なら普通だろう！男なら当たり前の欲求だろう！？おいこら・・・キモイとか思ったやつは謝れ！全国のエロが好きな男に謝りやがれ！

しかしこのエロさが原因なのか彼女は１７年間１回もできたことがない・・・

あぁ・・なぜか涙が。　ファク！！！

「お兄ちゃん！こんな大事な日にどこに行ってたの！？」

家のドアを開けるとおっかね～妹様が待っていた。

妹の名前は桐生飛鳥。１５歳でこの春から高１。妹つっても血は繋がっていない。飛鳥の両親は仲のよかった俺の両親に飛鳥を預けたまま二人で心中をした。そのことで俺の両親は飛鳥を引きっとた。こうして飛鳥は俺の妹になった。つまり義妹ってことだ。

「今日は義父さんと義母さんの命日だよ！なのにほっつき歩いて！」

そう。俺の親も3年前に交通事故で死んだ。その車には俺と飛鳥も乗っていたが俺達は奇跡的に助かった。まぁ事故の詳しいことは思い出せないんだがな。そうゆうわけで俺達は二人暮らしだ。

「ちょっとお兄ちゃん聞いてるの！？」

「分かったての！ごめんなさいでしたー！」

「お兄ちゃん・・・？」

怖っ！！！

「この度は、誠に申し訳ございませんでした・・・」

俺はすぐに土下座したね。プライド？んなもんあるかい！だって怖いもん！童貞のまま死にたくないもん！俺は・・・俺は童貞を捨ててから死ぬ！今言ったセリフかっこよくない？惚れてもいいよ？

「そこまでしなくても・・・もういいよ。ところでお兄ちゃんはなに買ってきたの？」

「よく言った！ガンダ・・・じゃなくて妹よ！それは・・・エロ本だ！」

どすっ！！！

あれ？なんか腹に痛みが・・・陣痛か？

おお、今度は今までのことが頭の中で再現されていく。なるほど・・・これが走馬灯現象か。

「えっちぃのは駄目だよ・・・お兄ちゃん？」

悪魔の囁きが聞こえた気がした。

「お兄ちゃんはご飯抜き！」

ふっ・・・この状態で飯が食えるか。

つうか、誰かこの痛みをどうにかして下さい。痛いです。ものすごく痛いです。死にます。

あっ！飛鳥のやつエロ本捨てやがったな！まだ読んでねぇのに！

仕方ない・・・明日また買ってくるか。

つあっ！

また腹に痛みが！

明日、エロ本買いに行けるかな・・・

はじまり（後書き）

はじめまして。キリリョーです。こんな小説を読んでくれてありがとうございます！
色々とパクリがあってすみません。
さあ、このはなしは青春真っ只中の高校生の話です。
・・・後書きって難かしいですねw
まぁ、これから頑張って行きたいと思います。
では、またお会いできたらうれしいです！

入学式と入部（前書き）

二話目です。

下ネタが多いです。

なんかすみません・・・w

入学式と入部

眠ぃ。

俺は9時に起きていた。

今日は飛鳥の入学式だからな。

だるそうに見えるって？当たり前だよ！馬鹿野朗！！！なんで妹の入学式に行かなきゃならんのだ。まぁ愚痴っていてもしゃぁないな。

飯でも食おう。今日の飯は何だろな～？

・・・飛鳥の奴、手ぇきやがったな。

カップラーメンか。胃がもたれるな。よし、コンビニでパンでも買うか。ついでにエロ本も買おう。もちろん飛鳥に捨てられたやつな！

なら早速準備するか。エロ本が待っている！ふ、ふふふふふ！笑いが止まらねぇよ！おい！

準備にかかった時間1分。神速の翔と呼んでくれ。

よし行くか。

あのエロ本の内容は何かな～？輪姦？触手？獣姦？純愛？ＢＬ？・・・うぇ。

今考えた事は忘れよう。レッツ、ポジティブシンキング！

「おはよう！翔！」

「んぁ？」

「おはよう！」

「なんでこんなとこに居るんだ？」

「今日飛鳥ちゃんの入学式だろ？一緒に見てようと思ってね」

「朝っぱらからご苦労なこった。んじゃ行くか」

「おう！」

こいつは蒼野嵐、幼馴染だ。こいつを一言で表すとさわやかな奴だ。勉強も運動もそこそこ、顔は結構イケメン、だが彼女は作らないらしい。何故だ？部活は軽音部に入っていてギター・・・だったけな？まぁいいや。

「ちっとコンビニ寄っていいか？飯買わねぇと」

「んじゃついでに俺もパンでも買おうかな」

「ならゲームでもするか・・・？」

「いつもどうりの展開だな・・・！」

俺達はよくゲームをする。ゲームに負けた奴は何かしらの罰をくらう。

「んじゃ負けた奴はコンビニで買うやつ奢りな」

「ＯＫ」

勝ったら飯とエロ本を買わせよう。ふっ・・・

「ゲームの内容は今からすれ違う女の子の５人目がブスか可愛いか当てよう」

「なら俺は、・・・可愛いほうで」

馬鹿め！可愛い子なんてそうそういるか！

「んじゃ俺はブスで。お、来た来た。ゲームスタート！」

一人目

「あれはないな。あだ名はオリゴンだな。絶対に」

「確かに・・・って失礼だぞ！」

「お前も確かにって言ったろうが」

二人目

「やばっ！めっちゃ可愛い！抱きたいわ！」

「なに言ってんだ！馬鹿！」

三人目

「ぴょー！！！あっ、鼻血が・・・」

「ほれ、ティッシュ」

四人目

「ここは美女の巣窟ですか！？」

「この時間帯は結構可愛い子通るからね～」

なに？

「お前！それ先に言えよ！」

「勝負は非情なんだよ・・・翔・・・」

やばい・・・俺、負けるんじゃね？・・・・エロ本が！

「このおおおお俺が、ままま負けるとでも？」

「めっちゃ動揺してるじゃんか！」

落ち着け・・・冷静になれ！桐生翔！

「この俺が勝てるとでも？あっ間違えた。負けるとでも？」

「完璧に死亡フラグたってるぞ」

五人目

「勝った・・・計画通り！」

「それは夜神さんのセリフだぞ・・・つうか負けるなんて・・・」

「勝利のチョキ！」

「お前は平沢さんか！」

嵐・・・ナイス、ツッコミ！

「いや～しかし、あの顔はひどいな・・・グレムリンとエイリアンを足したようなもんだぞ」

「失礼だけど俺もそう思うよ」

「どれ、写真を一枚」

「それだけは止めろ！」

「冗談だって。お、着いたぞ。何買ってもらおうかな～」

「高いのは勘弁してください」

「・・・」

「無視かよ！」

「エロ本が・・・ない。今月号がない・・・」

「お前俺にエロ本買わせようとしてたな！」

「まぁいいや。飯はこれでいいから買ってきてくれ」

エロ本は他のコンビニで買おう

「また無視かよ！」

嵐の奴がなんか騒いでるがほっておこう。しかし色々なエロ本があるな。陵辱モノ、触手モノ、輪姦モノ、ロリータモノ、色々あるね！もし分からない言葉があっても、よい子は調べちゃ駄目だぞ。俺との固い約束だ。

「買って来たぞってエロ本見ちゃいけません！」

「行くか・・・」

「なんで俺の話聞いてくれないんだよ！」

「そういや、入学式何時からだっけ？お前分かるか？」

「え？確か・・・１０時からかな。そろそろ会場に入っておかないと」

「仕方ない。走るか・・・」

「飯は？」

「会場で食う」

「んじゃ走りますか！」

はぁ～面倒なことになったな。俺らの通っている月園高校は俺ん家からは徒歩３０分なんだが遊びすぎたようだな。

それから走って１０分。走りっぱなしはやっぱきついな。やっと校門だよ・・・

「はあ、やっと着いたな」

「休んでる暇はないよ。早く行かないと」

あ～腹へった。

「もうここら辺で見てようぜ。後ろだが十分見えるしな」

「とか言って前だと飯食えないからだろ？」

ちっ！鋭いな・・・

「ほんじゃ、いただきまーす」

「なあ、今日は飛鳥ちゃん半ドンだろ？学校終わるまで待っててそれから遊びに行こうぜ」

「やばい、これ超うまい。これで２００円か。」

「翔、俺の話聞いてる？」

「あ？あ～聞いてる聞いてる。今日マッパで女の子ＬＯＶＥ！とか言いながら商店街爆走するんだろ？かっこいいぜ、お前。勇気あるな。俺には真似できないわ」

「違うわ！今日学校終わったら・・・」

「おっ。そろそろ始まるな。静かにしろよ」

「・・・」

なんだこいつ。泣き目でこっち見てやがる。テラキモスｗ

「新入生入場・・・」

先公の声が聞こえた。生活指導の小村か。うぜえな。俺はあまり真面目な生徒ではない。生徒会や先公どもから目をつけられてる。まったく嫌なもんだね。

「飛鳥ちゃん来たぞ。」

「おう」

嵐が指差した方向を見ると飛鳥がいた。

俺は目を奪われてしまった。ぶっちゃけるとすごく可愛かった。子供だと思っていたがもう子供ではないんだな。寂しいような嬉しいような・・・

飛鳥が俺に気付いて微笑んだ。何故だか俺は顔が赤くなってしまっ

た。妹に赤くなってどうすんだ？

飛鳥はそのまま通りすぎた。

「飛鳥ちゃん、可愛かったな」

「そうか？猿にも衣装だろ？」

「孫にも衣装な」

「・・・」

「また無視かよ！」

いやーそれから暇だったね。入学式が終わって帰ろうとしたら嵐が皆で遊びたいからって言うから飛鳥を待ったものはいいものを、とにかく暇だった。女の子のパンツでも見れればよかったのにな。

「お兄ちゃーん！嵐さーん！」

「あのボケ。やっちと来たな」

「ごめんなさい。おそくなっちゃって」

「ぜんぜん大丈夫だよ。入学式お疲れ」

「ありがとうございます。お兄ちゃんも来てくれてありがとう」

「そう思うなら朝からカップめんはＮＧだ」

「ごめんね。時間がなくて」

「まぁ、それはいいとしてどこに・・・」

「実は二人に相談があるんだ！」

なんだ？真剣な顔しやがって。なんか嫌な予感するな・・・

「なんだよ、金ならないぞ」

「軽音部に入ってくれ！」

こいつ、スルーしやがった。っては？

「悪いもう一回言ってくれ」

「軽音部に入ってくれ！」

・・・

「嫌だよ」

「お兄ちゃん、理由くらい聞こうよ。嵐さん、なんでですか？」

「それが今、キーボードとボーカルがいなくて・・・飛鳥ちゃんはキーボードできるし、翔は歌うまいし。せめて新入生歓迎会のライブだけでもいいから！」

嫌な予感が当たったな。俺、予言者？

「私は大丈夫ですよ。是非やらしてください！」

飛鳥の奴やる気満々だな。

「翔は？」

こんなかったるいことやってられるか！

「パス」

「え～お兄ちゃんもやろうよ」

お兄ちゃんはやりません。

「遠慮」

絶対にやらんぞ。何があってもやらんぞ。俺の意思は鋼のように固いからな。

「翔、ちょっと耳かせ」

「なんだよ」

気持ち悪いな～

「お前がずっと探してたあのＡＶをあげるから軽音部に入ってくれ・・・」

・・・

「翔？どうした？」

「お兄ちゃん？」

ふっ。今日はいい日だな・・・

「お前達！軽音部で青春しようぜ！」

「変わりみはえ～な！おい！」

「えっ？いきなりなんで！？」

こうして俺の青春が始まった。

入学式と入部（後書き）

いやーまた読んでくれてくれてありがとうございます！
どうも、キリリョーです。
こんかいも下ネタとパクリがあります。
ごめんなさい！ｗ
それでもいいと言うあなた！ありがとうございます！
下ネタ書いてたらムラムラしてきちゃいましたｗ
ヌくか・・・
それじゃまたお会いできたら嬉しいです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5296x/

あの日見た満月

2011年10月21日02時04分発行